

平成23年度埼玉大学卒業式式辞

今年は冬の寒さが厳しく、関東地方で春一番が吹かなかったのは12年ぶりだと言われています。しかし、今週に入って、その寒さも少し和らいできたように感じられます。昨年度は、3・11（3月11日）に発生した東日本大震災と福島原発事故の影響で、本学も卒業の式典を中止せざるをえませんでした。本年度はこのように無事執り行うことができました。本日ここに集われた卒業生の皆さん、おめでとうございます。

本年度の卒業生は、教養学部200名、教育学部493名、経済学部343名、理学部210名、工学部449名、合計1,695名であります。この中には、祖国を離れて埼玉大学に留学し、学業に励んできた方、42名が含まれております。私は、埼玉大学の教職員を代表し、皆さんに心よりお祝いを申し上げます。また、長年にわたって皆さんの学業を支え、今日という晴れの日をともに迎えられたご家族の皆様に対しましても、そのご労苦に敬意を表するとともに、お祝いを申し上げたいと存じます。

本日は皆さんの旅立ちの日でありますので、何をおいても饒の言葉を贈らなければならないところですが、どうしても震災の話から始めなければなりません。

ほんとうに大変なことが起こってしまいました。埼玉大学でも、何事もなければ、本日、皆さんと一緒に卒業式を迎えることができたはずの学生が一人、帰省中に津波にさらわれ、卒業がかなわなくなってしまいました。残念と言うほかありません。ここに集われた皆さんの中にも、家族を、友人を、知人を、あるいは家を失われた方がいらっしゃいます。あの日から1年が経過しましたが、今なお、被災者には悲しみと苦労が続いています。ぼろぼろになった福島原発では、これ以上深刻な事態が起こらないようにと、必死の作業を続けている人たちがいます。そういうことに想いを致すと、私たちが本日の式典で卒業を祝い、讃え合えることにも、申し訳ないような気持ちが入ってくるのを禁じることができません。

この気持ちには、他者の境遇を思いやり、悲しみを分かち合うという、人間らしい sympathy の感情に加えて、原発を押しつけられた被災地の犠牲の上に快適な生活を営んできたということからくる後ろめたさ、そういう罪悪感のようなものが働いています。被災地の復旧が遅れ、原発事故はというと、政府は昨年12月に収束宣言を発しましたが、除染や事故原発の廃炉、さらに放射能汚染の影響が完全に消えるまでを考えますと、この先何世代を要するとも知れない状況ですから、私たちのこういう感情が容易に薄まることはないでしょう。

今になって誰にもわかるようになりましたが、そもそも原発は開けてならな

い「パンドラの箱」だったのです。核融合や核分裂は太陽内における活動であり、原子力エネルギーは人が生息する地球の「生態圏」の内部で起こる現象ではありません。それを科学の力で原子核を不安定化させ、膨大なエネルギーを発生させるのですから、制御できなければ、コントロール不能になり、気の遠くなるような大変な負荷を「生態圏」にかけてしまいます。それが福島で起こってしまったのです。

福島原発事故は日本国内だけでなく、世界中に衝撃を走らせました。チェルノブイリに近いレベル7の事故であることを日本政府が認めた瞬間、原子力を巡る国際情勢は一気に変わり、スイス、ドイツ、イタリアが相次いで脱原発の方向に舵を切りました。このことは皆さんもよく知っていらっしゃるのだと思います。

永らく原発推進を国是としてきた日本においても、さすがに脱原発の気運が高まりました。脱原発、反原発の集会やデモも、日常現象になってきたように思えます。原発推進論で凝り固まっているかに見える経済界でも、震災後すぐにメガソーラー構想を発表したソフトバンクの孫正義社長のような人がでてきました。ここ埼玉県の上田知事は、この孫構想にすぐさま賛同の意を示されました。また、城南信用金庫の吉原毅理事長は「原発に頼らない安心できる社会」への取り組み宣言を出し、大きな反響を呼びました。

こうした動きを背景にして、震災後の復興と新しい日本の方向性を巡る議論の中でも、脱原発を中心に据えた言説が多数派を形成しつつあることに注目したいと思います。この動きは革新系学者がリードしていますが、保守派と目されてきた学者の中からも大胆な提案をする人が出てきているのです。例えば、佐伯啓思氏がそうです。少し見ておきましょう。

佐伯氏は、「文明の危機と世界観の転換」（『危機の思想』NTT出版、所収）という論文で、「人は、科学と技術によって自然を征服し、自然を支配して、その制約から解放され、こうして無限の自由と幸福を追求する権利を手にしたのであった。これが近代社会の基本的な価値であり、その極限が、自然がもたらす資源の制約を可能な限り縮小して経済発展を追求することであった。その意味で、原発は、近代主義の極致といってよい」と近代文明を総括しました。そして、「フクシマの事故は、この近代文明の行く手に本質的な疑問を突きつけた」とし、いま二つの選択肢が問われていると言います。その選択肢とは、第一が「この震災・事故を近代文明への大いなる警鐘と見なし、自由、幸福、富などの無限拡大をめざし効率性を追求する今日の経済システムの大転換を図る、という『脱近代主義』の方向」です。そして第二の選択肢とは「この震災・事故を繰り返しなされる近代主義への障害のひとつと見なして、より高度な技術開発によってその克服をめざすという『超近代主義』の方向」になります。

佐伯氏は、「前者の『脱近代主義』は、脱原発を含むだろう。それは脱成長経済を意味する。そしてそれは、競走や効率性という価値の見直しを意味し、一時的には経済の停滞をもたらす。しかし、経済中心主義を見直すことこそがこの選択の意義なのであり、そのためには価値観の大きな転換が必要とされる」と言い、他方、後者の「超近代主義」の方向には技術的楽天主義があるとして、「一つ選ぶとすれば『脱近代主義』の方向を選ぶ」と言い切ったのです。

佐伯氏風に言いますと、日本は「失われた10年」からの脱出策として、近代化の極北の姿としての新自由主義が正義とする激しい相互競争を選択した結果、貧富の格差拡大、社会の荒廃とそこから生まれる個人の孤立、老人が誰にも看取られずに死んでいかなければならない無縁社会などの問題が深刻化し、その反省から根本的な「転換」が唱えられてきましたが、それは今日まで先送りになってきました。しかし、原発事故で「転換」はもはや待ったなしの課題になったのです。佐伯氏は、それを「脱近代主義」の方向への「転換」として提起したわけです。

もっとも、佐伯氏の主張が、新しい社会のヴィジョンを描けているかということ、そうではありません。氏はまだ「脱」という形でしか将来の方向性を表現していませんし、新しい社会の積極的な価値理念も、その社会・経済システムのデザインも示せているわけではないのです。

新しい社会の価値理念については、これまでも様々な形で語られてきました。民主党政権ができたときに鳩山首相の口から発せられた「友愛」や「新しい公共」はその好例です。3・11後の過程でも、人々の営みの中から、そのコアになるようなものが芽をだしているように思われます。毎日のように連呼されてきましたので、ここであげるには少し躊躇するのですが、たとえば「絆」です。災害を経験したことで、モノやお金よりも、家族や友人との繋がりを重視する、人間関係を大事にするという、価値観が広がってきたと言われるのです。

多くの人をボランティア活動に突き動かしたのものにも注目する必要があるでしょう。埼玉大学においても、学生諸君が様々な形で被災者支援に立ち上がりました。女子バスケットボールの部員達は震災後直ぐに南与野駅前で義援金集めをしています。大学生協の学生委員達は直ぐに被災地に向かい、その後も週末ボランティアで何度も被災地に行きました。サークルで子どもの教育に関わっている学生達は、さいたまスーパーアリーナに避難している子どもに対して勉強や遊びを行うボランティアを実施しています。東ティモールにリサイクルした自転車を送る活動を行ってきた学生達は、その経験を生かし、3度にわたって合計113台もの自転車を被災地に送り届けています。教育学部と理学部の学生有志は、夏休みに、旧騎西高校に避難している双葉町の小・中・高校生に対し、ボランティアとして学習支援や父兄も交えたイベントを実施しまし

た。卒業生も動きました。「埼玉新聞」は今年の元旦号で、まるまる1頁を使って、本学教養学部の卒業生である佐藤文敬君が昨年4月から仙台入りし、長期ボランティアを続けていることを詳しく紹介しているのです。

私は、人々をこうした行動を向かわせるものとしての、他者の境遇を思いやり、悲しみを分かち合うという、人間らしい sympathy の感情に注目したいと思うのです。私は今、悲しみを分かち合う、と言いましたが、実を申しますと、これは財政学者である神野直彦氏の『「分かち合い」の経済学』（岩波新書）という本から借用した言葉なのです。この本によりますと、スウェーデン語に「オムソーリ（ omsorg ）」という素敵な言葉があります。この「オムソーリ」とは「社会サービス」を意味しますが、その原義は「悲しみの分かち合い」だということです。神野氏の言い方では、「『オムソーリ』は『悲しみを分かち合い』、『喜びを与えあい』ながら生きている、スウェーデン社会の秘密を説き明かす言葉だといってもいいすぎではない。」そして、「『分かち合い』は能動的な希望である。孤立した個人が行動しなければ、可能とならないからである。しかも、『分かち合い』は指導者によって創り出されるものでもない。社会のすべての構成員の行動を必要とするからである。」こういうことになります。こう見てきますと、皆さんも、この「悲しみの分かち合い」は、震災の被災者達が示した「互助」の精神にも通底する、重要な言葉に思えてくるのではないのでしょうか。

私は、いま述べたような「絆」や「悲しみの分かち合い」と齟齬するようでは、新しい価値理念となりえないと考えます。

今回の大震災そして原発事故を直接の契機にしつつ、今、様々な分野で転換期に入ってしまったのです。

卒業生の皆さん。そういうわけですので、皆さんには、短期の動向に一喜一憂するのではなく、この大きな転換期に、新しい人生を歩み始めるということこそ是非自覚してもらいたいと思います。そして、私が皆さんにその役割を引き受けてもらいたいと願うのは、新しい価値理念の創造に参加しつつ「転換」を担う、まさに担い手としての役割です。皆さんが今後どこで働くことになるにせよ、生活の拠点をどこに構えることになるにせよ、これからはその場、その場で「転換」の担い手が必要とされてきます。その役を自分から進んで引き受けるような人になってもらいたいのです。

今の若者は時として「コンサマトリー」という用語で語られることがあります。まだ20代の新進気鋭の評論家、古市憲寿氏はこう言います（『絶望の国の幸福な若者たち』講談社）。格差社会のもとでその「不幸」が報じられている若者たちですが、だが20代女子の76%、20代男子の66%が現在の生活に満足している。そういう「幸せな若者の正体は、『コンサマトリー』とい

う用語で説明することもできる。コンサマトリーというのは自己充足的という意味で、『今、ここ』の幸せを大事にする感性のことだと思ってくれればいい。何らかの目的達成のために邁進するのではなく、仲間たちとのんびり自分の生活を楽しむ生き方と言い換えてもいい。」「となると、いくら「格差社会」だとか「ブラック企業」だとか騒いだところで、若者たちが関係ないと考える限り、大きな運動なんて起きない可能性が高い。」

わたしは、ここに集われた皆さんが、古市氏が言うような「コンサマトリー」化している若者のようには思えません。しかし、仮に皆さんが「コンサマトリー」化した若者だとしても、そういう若者も「転換」の担い手になりうるというのが、今直面している「転換」だと言いたいと思います。古市氏も、「最近では、地方自治体に対して、放射線量測定とデータ公開を求める署名運動が盛んに行われた。その主要な担い手は『子どもを守りたい』と願う母親だった」ことに注意を促して、「コンサマトリー」化した若者でも「アクションを起こし、それが大規模なムーブメントになるきっかけ。それは、彼らが持つ価値観や規範意識が侵された時らしい」と述べています。原発事故が、その「きっかけ」をつくってしまったのです。

お金やモノでなく、なにより大事にしたいのが仲間。その仲間とは「悲しみを分かち合い」、「喜びを与え合い」たい人たちのことに他なりません。「転換」とは、そういう人たちが仲間だけの世界に閉じこもるのではなく、新しい価値理念の実現をめざして行動する、その行動の幾重もの重なり合いによって可能になると言って良いでしょう。

こういう意味での「転換」の担い手になるということは、実は公共的役割を果たすことだということを、ここで付け加えておきます。しかし、「公共」と言っても、それは決して「国家」のことではありません。日本では、伝統的な「おおやけ」の観念が社会に浸透し、「公共」は国家や官僚によって独占されてきましたが、今必要な「公共」とは、この10数年の『公共哲学』の研究で言われてきたように、生活世界に密着したところで形成される「市民的公共」とでもいうべきものなのです。

では、職業人としては、「転換」の担い手になるということはどういうことを指すのでしょうか。さきにソフトバンクの孫社長と城南信用金庫の吉原理事長の名前を挙げましたが、経済活動の現場はいま急速に変わってきています。仮に社長が『原発推進』の立場だとしても、企業は『脱原発』の方向に合致した行動を、経済活動としても、CSR（企業の社会的責任）としても求められてきているのです。皆さんには、そういう「転換」の担い手として頼りにされる人になっていただきたいのです。その際には、埼玉大学に学んで身につけた「知」と「技」が、きっと大きな力となるはずで、皆さんならできます。どうか自信

を持って、前に進んでください。

さて、本日は、皆さんの大先輩であり、現在同窓会連合会の会長として本学に貢献いただいております杉尾彰俊様をお迎えし、お言葉をお願いしています。杉尾様は1957年に本学文理学部理学科科学専攻をご卒業になり、卒業後は現在の三菱ガス化学株式会社で技術開発の仕事をされましたが、経営者としても活躍してこられた方です。皆さんを送り出す日にふさわしい、激励のお言葉を頂戴できると思いますので、期待してください。

最後になりましたが、皆さん一人ひとりの将来が幸運に恵まれ、それぞれに悔いのない人生を送られることを祈念して、私の式辞といたします。

平成24年3月23日

埼玉大学長 上井喜彦